置土産

国木田独歩

餅（もち）は円形（まる）きが普通（なみ）なるわざと三角にひねりて客の目を惹（ひ）かんと企（たく）みしようなれど実は餡（あん）をつつむに手数（てすう）のかからぬ工夫不思議にあたりて、三角餅の名いつしかその近在に広まり、この茶店（ちゃや）の小さいに似合わぬ繁盛（はんじょう）、しかし餅ばかりでは上戸（じょうご）が困るとの若連中（わかれんじゅう）の勧告（すすめ）もありて、何はなくとも地酒（じざけ）一杯飲めるようにせしはツイ近ごろの事なりと。

戸数（こすう）五百に足らぬ一筋町の東の外（はず）れに石橋あり、それを渡れば商家（あきんとや）でもなく百姓家でもない藁葺（わらぶ）き屋根の左右両側（りょうそく）に建ち並ぶこと一丁ばかり、そこに八幡宮（はちまんぐう）ありて、その鳥居（とりい）の前からが片側町（かたかわまち）、三角餅の

茶店(ちゃや)はこの外れにあるなり。前は青田、青田が尽きて塩浜、堤高くして海面(うみづら)こそ見えね、間近き沖には大島小島の趣も備わりて、まず眺望(ながめ)には乏しからぬ好地位を占むるがこの店繁盛の一理由なるべし。それに町の出口入り口なれば村の者にも町の者にも、旅の者にも一休息(ひとやすみ)腰を下(お)ろすに下ろしよく、ちょっと一ぷくが一杯となり、章魚(たこ)の足を肴(さかな)に一本倒せばそのまま横になりたく、置座(おきざ)の半分遠慮しながら窮屈そうに寝ころんで前後正体なき、ありうちの事ぞかし。

永年(ながねん)の繁盛ゆえ、かいなき茶店(ちゃみせ)ながらも利得は積んで山林田畑(でんぱた)の幾町歩は内々できていそうに思わるれど、

ここの主人（あるじ）に一つの癖あり、とかく塩浜に手を出したがり餅でもうけた金を塩の方で失（な）くすという始末、俳諧の一つもやる風流気（ぎ）はありながら店にすわっていて塩焼く烟（けむり）の見ゆるだけにすぐもうけの方に思い付くとはよくよくの事と親類縁者も今では意見する者なく、店は女房まかせ、これを助けて働く者はお絹（きぬ）お常（つね）とて一人（ひとり）は主人（あるじ）の姪（めい）、一人は女房の姪、お絹はやせ形（がた）の年上、お常は丸く肥（ふと）りて色白く、都ならば看板娘の役なれどこの二人（ふたり）は衣装（なり）にも振りにも頓着（とんちゃく）なく、糯米（もちごめ）を磨（と）ぐことから小豆（あずき）を煮ること餅を舂（つ）くことまで男のように働き、それで苦情一つ言わずいやな顔一つせず客

にはよけいなお世辞の空笑いできぬ代わり愛相よく茶もくんで出す、何を楽しみでかくも働くことかと問われそうで問う人もなく、感心な女とほめられそうで別に評判にも上らず、『いつもご精が出ます』くらいの定まり文句の挨拶をかけられ『どういたしまして』と軽く応えてすぐ鼻唄に移る、昨日も今日もかくのごとく、かくて春去り秋逝くとはさすがにのどかなる田舎なりけり。

　茶店のことゆえ夜に入れば商売なく、冬ならば宵から戸を閉めてしまうなれど夏はそうもできず、置座を店の向こう側なる田のそばまで出しての夕涼み、お絹

お常もこの時ばかりは全くの用なし主人（あるじ）の姪らしく、八時過ぎには何も片づけてしまい九時前には湯を済まして白地（しろじ）の浴衣（ゆかた）に着かえ団扇（うちわ）を持って置座に出たところやはりどことなく艶（なまめ）かしく年ごろの娘なり。

よそから毎晩のようにこの置座に集まり来る者二、三人はあり、その一人は八幡宮神主の悴（せがれ）一人は吉次（きちじ）とて油の小売り小まめにかせぎ親もなく女房もない気楽者その他（ほか）にもちょいちょい顔を出す者あれどまずこの二人を常連と見て可なるべし。二十七年の夏も半ばを過ぎて盆の十七日踊りの晩、お絹と吉次とが何かこそこそ親しげに話して田圃（たんぼ）の方へ隠れたを見たと、さ

も怪しそうにうわさせし者ありたれど恐らくそれは誤解ならん。なるほど二人は内密話（ないしょばなし）しながら露繁（しげ）き田道をたどりしやも知れねど吉次がこのごろの胸はそれどころにあらず、軍夫（ぐんぷ）となりてかの地に渡り一かせぎ大きくもうけて帰り、同じ油を売るならば資本（もとで）をおろして一構えの店を出したき心願、少し偏屈な男ゆえかかる場合に相談相手とするほどの友だちもなく、打（ぶ）ちまけて置座会議に上（のぼ）して見るほどの気軽の天稟（うまれ）にもあらず、いろいろ独（ひと）りで考えた末が日ごろ何かに付けて親切に言うてくれるお絹お常にだけ明かして見ようとまずお絹から初めるつもりにてかくはふるまいしまで

なり、うたてや吉次は身の上話を少しばかり愚痴のように語りしのみにてついにその夜は軍夫の一件を打ち明け得ずしてやみぬ。何のことぞとお絹も少しは怪しく思いたれど、さりとて別に気にもとめざりしようなり。

　その次の夜(よ)も次の夜も吉次の姿見えず、三日目の夜の十時過ぎて、いつもならば九時前には吉次の出て来るはずなるを、どうした事やらきのうも今日(きょう)も油さえ売りにあるかぬは、ことによると風邪(かぜ)でも引いたか、明日(あす)は一つ様子を見に行ってやろうとうわさをすれば影もありありと白昼(ひるま)のような月の光を浴びてそこに現

われ、

『皆さん今晩は』といつになきまじめなる挨拶（あいさつ）、黙って来て黙って腰をかけあくびの一つもするがこの男の柄なるを、さりとは変なと気づきし者もあり気づかない者もあり、その内にもお絹はすこぶる平気にて、

『吉さんどうかしたの。』

『少し風邪を引いて二日ばかり休みました』と自ら欺き人をごまかすことのできざる性分のくせに嘘（うそ）をつけば、人々疑わず、それはそれはしかしもうさっぱりしたかねとみんなよりいたわられてかえってまごつき、

『ありがとう、もうさっぱりとしました。』

『それは結構だ。時に吉さん女房を持つ気はないかね』と、突然におかしな事を言い出されて吉次はあきれ、茶店の主人幸衛門の顔をのぞくようにして見るに戯談とも思われぬところあり。

『ヘイ女房ね。』

『女房をサ、何もそんなに感心する事はなかろう、今度のようなちょっとした風邪でも独身者ならこそ商売もできないが女房がいれば世話もしてもらえる店で商売もできるというものだ、そうじゃアないか』と、もっともなる事を言われて、二十八歳の若者、これが普通ならば別に赤い顔もせず何分よろしくとまじめで頼ま

ぬまでも笑顔（えがお）でうけるくらいはありそうなところなれど吉次は浮かぬ顔でよそを向き

『どうして養いましょう今もらって。』

『アハハハハハ麦飯を食わして共稼（ともかせ）ぎをすればよかろう、何もごちそうをして天神様のお馬じゃアあるまいし大事に飼って置くこともない。』

『吉さんはきっとおかみさんを大事にするよ』と、女は女だけの鑑定（みたて）をしてお常正直なるところを言えばお絹も同意し

『そうらしいねエ』と、これもお世辞にあらず。

『イヤこれは驚いた、そんなら早い話がお絹さんお常

さんどちらでもよい、吉さんのところへ押しかけるとしたらどんな者だろう』と、神主の悴(せがれ)の若旦那(わかだんな)と言わるるだけに無遠慮なる言い草、お絹は何と聞きしか

『そんならわたしが押しかけて行こうか、吉(きっ)さんいけないかね。』

『アハハハハハばかを言ってる、ドラ寝るとしよう、皆さんごゆっくり』と、幸衛門の叔父(おじ)さん歳(とし)よりも早く禿(は)げし頭をなでながら内に入りぬ。

『わたしも帰って戦争の夢でも見るかな』と、罪のない若旦那の起(た)ちかかるを止めるように

『戦争はまだ永く続きそうでございますかな』と吉次

が座興ならぬ口ぶり、軽く受けて続くとも続くともほんとの戦争はこれからなりと起（た）ち上がり

『また明日（あす）の新聞が楽しみだ、これで敗戦（まけいくさ）だと張り合いがないけれど我軍（こっち）の景気がよいのだから同じ待つにも心持ちが違うよ。』お寝（やす）みと帰ってしまえば後（あと）は娘二人と吉次のみ、置座（おきざ）にわかに広うなりぬ。夜はふけ月さえぬれど、そよ吹く風さえなければムッとして蒸し熱き晩なり。吉次は投げるように身を横にして手荒く団扇（うちわ）を使いホッとつく嘆息（ためいき）を紛らせばお絹

『吉（きっ）さんまだ風邪がさっぱりしないのじゃアないのかね。』

『風邪を引いたというのは嘘（うそ）だよ。』
『オヤ嘘なの、そんならどうしたの。』
『どうもしないのだよ。』
『おかしな人だ人に心配させて』とお絹は笑うて済ますをお常は
『イヤ何か吉さんは案じていなさるようだ。』
『吉さんだって少しは案じ事もあろうよ、案じ事のないものは馬鹿（ばか）と馬鹿（うましか）だというから。』
『まだある若旦那』と小さな声で言うお常もその仲間なるべし。
それよりか海に行（い）こうとお絹の高い声に、店の内にて、

もう遅（おそ）いゆえやめよというは叔父なり、

『叔父さんまだ起きていたの、今汐（しお）がいっぱいだからちょっと浴びて来ます浅いところで。』

『危険危険（あぶないあぶない）遅いから。』

『吉さんにいっしょに行ってもらいます。』

『そんならいいけれども。』

さアと促されて吉次も仕方なく連れだって行けば、お絹は先に立ち往来を外（はず）れ田の畔（くろ）をたどり、堤の腰を回（めぐ）るとすぐ海なり。沖はよく和（な）ぎて漣（さざなみ）の皺（しわ）もなく島山の黒き影に囲まれてその寂（しずか）なるは深山（みやま）の湖水かとも思わるるばかり、足もとまで月影澄み遠浅（とおあさ）の砂白く

水底に光れり。磯高く曳き上げし舟の中にお絹お常は浴衣を脱ぎすてて心地よげに水を踏み、ほんに砂粒まで数えらるるようなと、海近く育ちて水に慣れたれば何のこわいこともなく沖の方へずんずんと乳の辺りまで出ずるを吉次は見て懐に入れし鼈甲の櫛二板紙に包んだままをそっと袂に入れ換えて手早く衣服を脱ぎ、そう沖へ出ないがいいと言い言い二人のそばまで行けば

『吉さんごらんよ、そら足の爪まで見えるから』とお常が言うに吉次

『もうここらで帰ろうよ。』

『背のとどかないところまで出ないと游（およ）いだ気がしないからわたしはもすこし沖へ出るよ』とお絹はお常を誘うて二人の身体（からだ）軽（かろ）く浮かびて見る見る十四、五間先へ出（い）でぬ。

『いい心持ちだ吉さんおいでよ』と呼ぶはお絹なり、吉次は腕を組んで二人の游ぐを見つめたるまま何とも答えず。いつもならばかえって二人に止めらるるほど沖へ出てここまでおいでとからかい半分おもしろう游ぐだけの遠慮ない仲なれど、軍夫を思い立ちてより何事も心に染まず、十七日の晩お絹に話しそこねて後はわれ知らずこの女に気が置かれ相談できず、独（ひと）りで二

日三日商売もやめて考えた末、いよいよ明日（あす）の朝早く広島へ向けて立つに決めはしたものの餅屋の者にまるっきり黙ってゆく訳にゆかず、今宵（こよい）こそ幸衛門にもお絹お常にも大略（あらまし）話して止めても止まらぬ覚悟を見せん、運悪く流れ弾（だま）に中（あた）るか病気にでもなるならば帰らぬ旅の見納めと悲しいことまで考えて、せめてもの置土産（おきみやげ）にといろいろ工夫したあげく櫛二枚を買い求め懐（ふところ）にして来たのに、幸衛門から女房をもらえと先方は本気か知らねど自分には戯談（じょうだん）よりもつまらぬ話を持ち出されてまず言いそこね、せっかくお常から案じ事のあるらしゅう言われたを機会（しお）に今ぞと思うより早

くまたもくだらぬ方に話を外(はず)され、櫛を出すどころか、心はいよいよ重うなり、游ぐどころか、つまらないやら情けないやら今游ぐならば手足すくみてそのまま魚の餌(えば)ともなりなん。

『吉(きっ)さんおいでよ』とまたもやお絹呼びぬ。

『わたしは先へ帰るよ』と吉次は早々(そうそう)陸(おか)へ上がる後ろよりそんならわたしたちも上がる待っていてと呼びかけられ、待つはずの吉次、敵(かたき)にでも追われて逃げるような心持ちになり、衣服(きもの)を着るさえあわただしく、お絹お常の首のみ水より現われて白銀(しろかね)の波をかき分け陸(おか)へと游ぐをちょっと見やりしのみ、途(みち)をかえて堤へ上(のぼ)

り左右に繁(しげ)る萱(かや)の間を足ばやに八幡宮の方へと急ぎぬ。

老松(おいまつ)樹(た)ちこめて神々(こうごう)しき社(やしろ)なれば月影のもるるは拝殿階段(きざはし)の辺(あた)りのみ、物すごき木(こ)の下闇(したやみ)を潜(くぐ)りて吉次は階段(きざはし)の下(もと)に進み、うやうやしく額(ぬか)づきて祈る意(こころ)に誠をこめ、まず今日が日までの息災を謝し奉り、これよりは知らぬ国に渡りて軍(いくさ)の巷(ちまた)危うきを犯し、露に伏し雨風に打たるる身の上を守りたまえと祈念し、さてその次にはめでたく帰国するまで幸衛門を初めお絹お常らの身に異変なく来年の夏またあの置座(おきざ)にて夕(ゆうべ)涼しく団居(まどい)する中にわれわれをも加えたまえと祈り終わりてしばしは頭(かしら)を得上げざりしが、ふと気が付いて

懐（ふところ）を探り紙包みのまま櫛二枚を賽銭箱（さいせんばこ）の上に置き、他（ほか）の人が早く来て拾えばその人にやるばかり彼二人がいつものように朝まだき薄暗き中に参詣（さんけい）するならば多分拾うてくれそうなものとおぼつかなき事にまで思いをのこしてすごすごと立ち去りけり。

お絹とお常は吉次の去った後（あと）そこそこに陸（おか）へ上がり体（からだ）をふきながら

『お常さん、これからちょいと吉さんの宅（うち）をのぞいて見ようよ、様子が変だからわたしは気になる。』

『明日（あす）朝早くにおしよ、お詣（まい）りを済ましてすぐまわって見ようよ。あんまり遅（おそ）くなると叔父さんに悪いか

ら。』

『そうね』とお絹もしいては勧めかね道々二人は肩をすり寄せ小声に節（ふし）を合わして歌いながら帰りぬ。

＊　＊　＊　＊

若い者のにわかに消えてなくなる、このごろはその幾人というを知らず大概は軍夫と定（き）まりおれば、吉次もその一人ぞと怪しむ者なく三角餅の茶店のうわさも七十五日経（た）たぬ間（ま）に吉次の名さえ消えてなくなりぬ。お絹お常のまめまめしき働きぶり、幸衛門の発句（ほっく）と塩、神主の倅（せがれ）が新聞の取り次ぎ、別に変わりなく夏過ぎ

秋逝（ゆ）きて冬も来にけり。身を切るような風吹きて霙（みぞれ）降る夜の、まだ宵ながら餅屋ではいつもよりも早く閉（し）めて、幸衛門は酒一口飲めぬ身の慰藉（なぐさみ）なく堅い男ゆえ炬燵（こたつ）へ潜（もぐ）って寝そべるほどの楽もせず火鉢（ひばち）を控えて厳然（ちゃん）と座（すわ）り、煙草（たばこ）を吹かしながらしきりに首をひねるは句を案ずるなりけり。

『猿（さる）も小簑（こみの）をほしげなりというのは今夜のような晩だな。』

『そうね』とお絹が応（こた）えしままだれも対手（あいて）にせず、叔母（おば）もお常も針仕事に余念なし。家内（やうち）ひっそりと、八角時計の時を刻む音ばかり外は物すごき風狂えり。

『時に吉さんはどうしてるだろう』と幸衛門が突然（だしぬけ）の大きな声に、

『わたしも今それを思っていたのよ』とお絹は針の手をやめて叔父の方を見れば叔父も心配らしいまじめな顔つき。

『叔父さんあっちは大変寒いところだというじゃアありませんか』とお常は自分の足袋（たび）の底を刺しながら言いぬ。

『なに吉さんはあの身体（からだ）だもの寒（かん）にあてられるような事もあるまい』と叔母は針の目を通しながら言えり。

『イヤそうも言えない随分ひどいという事だから』と

叔父のいうに随(つ)いてお絹
『大概にして帰って来なさればよいに、いくらお金ができても身体(からだ)を悪くすれば何にもなりゃアしない。』
『ナニあの男の事だからいったんかせぎに出たからにはいくらかまとまった金を握るまでは帰るまい、堅い珍しい男だからどうか死なしたくないものだ。』
『ほんとにね』とお絹は口の中(うち)、叔母は大きな声で
『大丈夫、それにあの人は大酒を飲むの何のと乱暴はしないし』と受け合い、鬢(びん)の乱(ほつれ)を、うるさそうにかきあげしその櫛(くし)は吉次の置土産(おきみやげ)、あの朝お絹お常の手に入りたるを、お常は神のお授けと喜び上等ゆえ外出行(よそゆ)

きにすると用箪笥(ようだんす)の奥にしまい込み、お絹は叔母に所望(しょもう)されて与えしなり。

　二十八年三月の末お絹が親もとより二日ばかり暇をもろうて帰り来(こ)よとの手紙あり、珍しき事と叔父幸衛門も怪しみたれどともかくも帰って見るがよかろうと三里離れし在所の自宅へお絹は三角餅を土産に久しぶりにて帰りゆきぬ。何(なん)ぞと思えば嫁に行けとの相談なり。継母(ままはは)の腹は言うまでもなく姉のお絹を外に出して自分の子、妹のお松を後(あと)に据えたき願い、それがあるばかりにお絹と継母(ままはは)との間おもしろからず理屈をつけて叔父幸衛門にお絹はあずけられかれこれ三年の間お

絹のわが家に帰りしは正月一度それも機嫌よくは待遇われざりしを、何のかのと腹にもない親切を言われ先方は田が幾町山がこれほどある、婿はお前も知っているはずと説かれてお絹は何と答えしぞ。その夜七時ごろ町なる某という旅人宿の若者三角餅の茶店に来たり、今日これこれの客人見えて幸衛門さんに今からすぐご足労を願いますとのことなり。幸衛門は多分塩の方の客筋ならんと早速まかり出でぬ。

次の日奥の一室にて幸衛門腕こまぬき、茫然と考えているところへお絹在所より帰り、ただいまと店に入ればお常はまじめな顔で

『叔父さんが奥で待っていなさるよ、何か話があるって。』

お絹にも話あり、いそいそと中庭から上がれば叔父の顔色ただならず、お絹もあらたまって

『叔父さんただいま、自宅（うち）からもよろしくと申しました。』

『用事は何であったね、縁談じゃアなかったか。』

『そうでございました、難波（なんば）へ嫁にゆけというのであります。』

『お前はどうして』と問われてお絹ためらいしが

『叔父さんとよく相談してと生（なま）返事をして置きまし

た。』

『そうか』と叔父は嘆息（ためいき）なり。

『叔父さんのご用というのは何。』

『用というのではないがお前驚いてはいけんよ、吉さんはあっちで病死したよ。』

『マあ！』とお絹は蒼（あお）くなりて涙も出（い）でず。

『実はわたしも驚いてしまったのだ、昨夜（ゆうべ）何屋の若者が来て、これこれの客人がすぐ来てくれろというから行って見ると、その人はあっちで吉さんとごく懇意にしていた方で、吉さんが病気を親切に看病してくださったそうな。それで吉さんの死ぬる時吉さんから二

百円渡されてこれを三角餅の幸衛門に渡し幸衛門の手からお前に半分やってくれろ、半分は親兄弟の墓を修復(しゅふく)する費用にしてその世話を頼むとの遺言、わたしは聞いて返事もろくろくできないでただ承知しましたと泣く泣く帰って来ました。』

『マアどうしたらよかろう、かあいそうに』とお絹は泣き伏しぬ。

『それでは遺言どおりこの百円はお前に渡すから確かに受け取っておくれ』と叔父の出す手をお絹は押しやって

『叔父さんわたしは確かに受け取りました吉さんへは

わたしからお礼をいいます、どうかそれで吉さんの後を立派に弔うてください、あらためてわたしからお頼みしますから。』

（明治三十三年九月作）

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店
　　　１９３９（昭和14）年2月15日第1刷発行
　　　１９７２（昭和47）年8月16日第37刷改版発行
　　　　　２００２（平成14）年4月5日第77刷発行
底本の親本：「武蔵野」民友社
　　　１９０１（明治34）年3月
初出：「太陽」
　　　１９００（明治33）年12月
入力：土屋隆
校正：蒋龍
２００９年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。